

栃木県埋蔵文化財センターだより

2008
3月
やま
かいど

発行 平成20年3月10日
栃木県教育委員会
宇都宮市埴田1-1-20
TEL 028-623-3425
編集 (財)とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター
下野市紫474
TEL 0285-44-8441
FAX 0285-44-8445
URL <http://www.maibun.or.jp>



CONTENTS

- 埋蔵文化財センターの整理室から
森後遺跡の玉類と土器
- 発掘調査レポート
真岡市教育委員会 真岡城跡・城内遺跡
壬生町教育委員会 車塚古墳群
那珂川町教育委員会 新屋敷古墳
上三川町教育委員会 上神主・茂原官衙遺跡
- 特集：古代の衣・食・住
- 保存処理レポート
- 埋蔵文化財担当者研修会
- 平成19年度の現地説明会
- 埋蔵文化財センターの体験学習
- 栃木県総合文化センターでの遺物展示
- 埋蔵文化財センターでの遺物展示

埋蔵文化財センターの整理室から

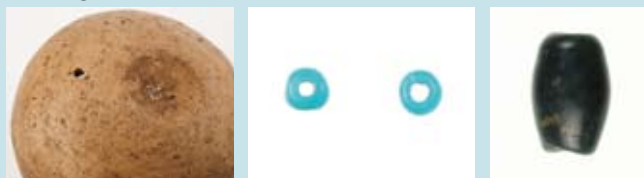
もりうら いせき 森後遺跡の玉類と土器 (さくら市)



⑤の底面

ガラス小玉

棗玉



勾玉

細い管玉

太い管玉

森後遺跡は、さくら市鹿子畑地内(旧喜連川町)にあります。発掘調査によって、多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見されました。その中で、この地域ではあまりみつからなかった古墳時代前期(約1700年～1600年前)の竪穴住居跡が6軒確認されました。これにより、古墳時代前期(栃木県内で古墳を造り始めた頃)に、森後遺跡にも、人々が住んでいたことがわかりました。またこれらの竪穴住居跡の1軒では、めずらしい遺物が発見されました。今回は、その出土品の一部を見てみましょう。

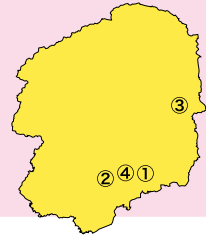
左上の写真は1軒の竪穴住居跡から出土した土器群です。①は外側だけでなく内側も赤く塗られている甕かめです。口の縁の所に2つの穴が並んで開けられていて、反対側にも同じように穴が開けられています。この穴に紐などを通して使ったのかもしれませんが。②は底の部分に台のついた台付甕。③はとても小さな甕形の土器で、非常に丁寧に作られています。④は器をのせるための器台きだい。⑤は頸から口の部分が欠けてしまっている小さな壺です。この丸い壺の底近くには、小さな穴が開いていました。この穴は土器を焼き上げる前に開けられたものです(左下拡大写真)。これらの赤く塗られた土器や、底に小さな穴が開けられた土器などは、日用的な土器ではなく、儀式など特別な目的に使われたと考えられています。

また、これらの土器と一緒に、勾玉や管玉、ガラス小玉、棗玉など多数の玉類が発見されました(右写真)。勾玉はC字状をして糸を通す穴が開けられています。管玉には細く短いものと(直径約4mm、長さ約2cm)、これより太く長いもの(直径約7mm、長さ約3cm)の2種類が見られます。ガラス小玉は、大変小さなもので、淡い水色の人工的なガラスを素材として、1mmほどの穴が真ん中に開けられています。棗玉は、棗の実に似ているのでこう呼ばれます。これらの玉類は装身具として、当時も貴重品であったと考えられます。このように、いろいろな種類の玉が、1軒の住居跡からまとまって出土するのは、大変めずらしいことです。儀式用の土器と貴重な玉類をたくさん持っていることから、この住居には、地域の支配者(リーダー)が住んでいたのかもしれません。

(財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター 0285-44-8441)

■ 発掘調査レポート

平成19年度も栃木県内では、たくさんの発掘調査が実施されました。ここでは、そのうちの4遺跡を紹介いたします。



① 真岡城跡・城内遺跡 (真岡市)

真岡城跡・城内遺跡は、明治の頃から小学校の敷地でした。「こだまが丘」とよばれる高台で、東には行屋川、西には、むかし、真岡木綿をさらしたといわれる大悪水と呼ばれる用水があります。現在使われている鉄筋校舎を建て替えることとなり、その解体及び新築工事に先だって新校舎建設部分約 2,400 m²を発掘調査しました。

ここは縄文時代の集落跡である城内遺跡と、中世に芳賀氏が築造した真岡城という城跡との複合遺跡です。昭和 40 年代初めに現校舎を建てる際、縄文土器が出土した記録が残っています。今回の調査では縄文時代・古墳時代・中世の遺構が発見されました。

縄文時代では袋状土坑と呼ばれる当時の貯蔵庫のようなものが 10 基見つかりました。そこから縄文時代中期(約 5000 年前)の土器が発見されています。

古墳時代の遺構は、調査区西側から前期の竪穴住居跡が 2 軒見つかりました。ほぼ四角形で、1 辺が 10 m 近くある大きな住居跡です。これにより、縄文時代だけでなく、古墳時代にも集落があったことがわかりました。

中世のお城の跡としては東西の大きな堀を確認しました。古い地図で調べると、お城の二の丸と三の丸を区画する堀のようです。堀は北側から埋められています。北側には土塁があったので、それを崩して埋めていったと考えられます。本丸を土塁や堀で防備していた様子が窺えます。(真岡市教育委員会事務局文化課 0285-83-7731)



縄文時代の住居跡



中世の堀断面

② 車塚古墳群 (壬生町)

車塚古墳群は黒川の東岸の台地上に築かれた国指定史跡の車塚古墳と牛塚古墳を中心とする古墳時代後期の古墳群です。車塚古墳群の南には、近接して国指定史跡の愛宕塚古墳が位置し、古代下毛野国を代表する一大古墳群を形成しています。今回の車塚古墳群の発掘調査は、赤土採取工事により発見された円墳 1 基、竪穴式小石室 2 基(6・7号墳)の調査を行いました。調査地区は車塚古墳の北、約 100 m 離れた距離にあります。

円墳は発見された周溝の一部から推測すると、直径約 32 m の古墳と考えられます。また、古墳の中心部からも多くの川原石が出土していることから、川原石で構築された石室をもった円墳と考えられます。

発見された 2 基の竪穴式の小石室は、いずれも壁の根石の部分と床面のみが残るだけでした。6号墳の石室は幅 1 m、長さ約 3 m の規模と推測できますが、壁の高さについては不明です。床面には大小不規則な川原石が敷かれ、床面から鉄鏝が 2 本出土しました。7号墳についても南端部が調査区外であったため、全容を確認することはできませんでしたが、石室の規模は幅が 1 m、長さが 2.5 m 程と推測されます。石室の床面上からは、直刀の一部が出土しています。なお 2 基の小石室の周囲からは、周溝は確認されていません。古墳に埋葬された者の権力の大小により、古墳の形態も変わることがわかります。



車塚 6号墳の石室

(壬生町教育委員会事務局生涯学習課 歴史民俗資料館 0282-82-8544)

あらやしきこふん
③新屋敷古墳 (那珂川町)

新屋敷古墳は那須郡那珂川町浄法寺にあり、那珂川と箒川の合流から約2km 遡った箒川右岸の河岸段丘上に位置しています。

周辺には奈良・平安時代の郡役所である国指定史跡那須官衙遺跡や七世紀末の築造と考えられる浄法寺廃寺跡、全長 50 m の前方後円墳である梅曾大塚古墳 (消滅)、熊野堂横穴、浄法寺館跡、奈良時代に遡る古道跡などが集中的に認められています。このことから当地区は、那須地域を代表する重要な遺跡が古墳時代から奈良時代にかけて同一地域で継続して営まれるところとして以前から注目されてきました。

新屋敷古墳は、南に開口する石室の存在から古墳と認識されましたが、形状や規模などについては、全くわかっていませんでした。平成 18 年度に実施した墳丘測量調査により、一部削平を受けているものの直径 15.5 m、高さ 3 m の円墳と想定されました。墳丘には、葺石はなく、埴輪も認められていませんでした。石室の遺存状態は、天井石が奥壁寄りの一枚を除いて石室外に除去されていますが、石室入口の閉塞部分は完存している可能性があります。石室床面には約 1m の土砂が堆積していました。石室は、川原石の狭い面が石室の内面となるように積んだ小口積みによるものです。石室の最大幅は奥壁から約 1m 手前にあり、いわゆる「胴張型」の横穴式石室です。閉塞部分は未調査ですが、現在判明している規模は全長 5 m 以上、奥壁幅 1.5 m、最大幅 1.8 m、天井高 2 m です。出土遺物には、ガラス小玉と鉄鏃片があります。

(なす風土記の丘資料館 0287-96-3366)



新屋敷古墳



新屋敷古墳の石室

かみこうぬし も ぼらかんが い い せ き
④上神主・茂原官衙遺跡 (上三川町)

上神主・茂原官衙遺跡は、平成 15 年に国指定史跡となった奈良時代を中心とした下野国河内郡役所と推定される遺跡です。これまでの発掘調査では、堀と塀のようなもので囲まれた南北約 390 m・東西約 250 m におよぶ広大な範囲に、掘立柱建物跡を中心に竪穴建物跡・礎石建物跡など、合わせて 90 棟を超える建物跡が確認されました。

上三川町では、平成 18 年度から 5 ヶ年計画で今後の整備に向けて発掘調査を実施しています。2 年目の今年度は、大型瓦葺建物の周辺部分の全容確認を中心に調査を実施しました。

大型瓦葺建物の周辺は、政庁の中心建物の南側に位置し、正倉でも重要な地域であることが考えられます。このことから、大型瓦葺建物と前後する時期に、これとは別の重要な建物が存在する可能性が考えられました。調査の結果、3 棟の建物の全容がほぼ確認されたほか、大型瓦葺建物に伴う南側の区画溝も発見されました。また、大型瓦葺建物に使われた大量の瓦が出土しました。特に調査区内の東では、建物廃絶後に大量の瓦を寄せ集めたと考えられる「瓦溜まり」が確認されています。整理作業を実施していないため、詳細な点数は不明ですが、人名文字瓦も多数出土しており、貴重な資料が更に増加したことになります。

(上三川町教育委員会生涯学習課 0285-56-9160)



大量の瓦が出土している様子



平成 19 年度調査区の全景

特集：古代の

古代(奈良・平安時代)の日本は、中国大陸や朝鮮半島の政治・文化の習慣や風俗が、わが国にもたらされ、衣・食・住の内容は古墳から「役人のよそおい」・「氷」・「トイレ事情」にスポットライトをあて

古代の衣 - 役人たちのよそおい -

下に2枚の写真がありますが、上の写真はいったい何でしょう。いずれも栃木県内の遺跡から出土したものです。左のかまぼこ形のもは石を加工して作られています。右の四角形のもは銅製です。大きさは4cmくらいです。

答えは飾り帯に付けられた部品です。奈良時代の役人たちが腰に巻いていました。帯につける部品の大きさ、材質の違いによって、身分の上下を表したといわれています。ちなみに、かまぼこ形のもが丸鞆(まるとも)、四角形のもが巡方(じゅんぼう)といえます。下段の写真が復元した飾り帯です。少し装飾が派手ですが、現在私たちが使っているベルトによく似ていますね。



①辻の内遺跡(宇都宮市) 石製丸鞆



②溜ノ台遺跡(小山市) 銅製巡方



③役人の飾り帯(復元品)

《写真》

- ①②栃木県教育委員会
- ③ 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

参考文献

帯金具のいろいろ

『第17回企画展 律令国家の誕生と下野国-変革の7世紀社会』栃木県教育委員会・栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 2003

役人の飾り帯

『第16回企画展 律令国家の地方官衙 - 古代の役所Ⅱ -』栃木県教育委員会・栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 2002

古代の食 -

古代の食については、書かれた文字などから多くの内容を知ることができ、かどうかわかりませんが、現在の食品や調理法と違いはないようです。ここでは、さまざまなお菓子を紹介します。

平安時代の女流文学者清少納言は、「あまのこころ(あまのこころ)として「削り氷(かき氷)にあまのこころ(あまのこころ)に入れて」と、あまのこころの五感を文章に残しています。

氷は今、冷凍技術の進歩によって、簡単に手に入りますが、古代においては、冬の間には氷を貯蔵して大事に使ったものと思われます。



①天然氷のかき氷



④発掘された氷室跡 文殊山遺跡(下野市)

参考文献

『文殊山遺跡』 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1999

衣・食・住

文化を手本に国づくりをおこなっていました。また同時に、それ時代以前と比べ多様になりました。ここでは、古代の衣・食・住かて、それぞれの様子を垣間見てみましょう。

あてなるもの -

や奈良県東大寺正倉院の宝物、発掘資料です。当時、食に関する偽装問題があったや料理、食器の内容と比較しても、大きなまな「食」の中から「氷」について紹介し

その作品『枕草子』の中で「あてなるもの(上あまづら(シロップ)いれて、新しき金鉢(かひときわ暑い京都の夏に、かき氷を口にし

一年中、私たちの暮らしの中に溶け込んで池で凍らせた氷を、夏まで氷室に貯蔵して、



② 佐波理 (銅、錫などの合金) 製スプーン 星の宮ケカチ遺跡 (益子町)



③ 佐波理鉢 (復元品)

《写真》

- ② 益子町教育委員会
- ③ 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ④ 栃木県教育委員会

古代の住-古代のトイレうんちく話-

おいしいものを食べる。食べたものは、当然出さなくてはなりません。トイレは大変重要な施設で、皆さんの家にも必ず付いていると思います。では、古代のトイレ事情はどの様なものだったのでしょうか。奈良県藤原京(ふじわらきょう)・平城京(へいじょうきょう)などの都の役所や貴族の屋敷には、汲み取り式のトイレのほか、水洗式もあったようです。しかし、水洗式でも屋敷の外に汚物を流すだけなので、かなりの臭いがただよっていたようです。都市公害の始まりとも言えます。

古代のトイレの土を科学的に分析すると、食べたもののかすや寄生虫の卵などが発見され、古代人が何を食べていたのかが分かるようになってきました。次の①～③が、古代のトイレを肉眼で判断する手がかりです。

- ① 穴の中が、つややかな真っ黒な土(ウンチが土になったもの) で埋まっていること。
- ② 籐木(ちゅうぎ)(トイレットペーパー) が発見されること。ウンチの後始末を細い木のヘラでしていました。
- ③ 大量のウリの種が混じっていること。古代の人はウリを種ごと食べていたからです。



①トイレの模型



② 籐木とトイレットペーパー



③トイレ遺構の調査

《写真提供》

- ①～③ 独立行政法人 奈良文化財研究所

参考文献

「飛鳥・藤原京展」-古代律令国家の創造- 奈良文化財研究所・朝日新聞社事業本部大阪企画事業部 2002

保存処理レポート

伝北条時子姫五輪塔の保存修復

埋蔵文化財センターの保存処理室の仕事の一つに、市町村所有文化財の保存修復指導があります。今回のレポートは、足利市教育委員会による市指定文化財である石造文化財「伝北条時子姫五輪塔」(法玄寺)の保存修復のお話です。

埋蔵文化財は保存処理後、室内に収めますが、屋外に置かれていた石造文化財は、保存修復後も屋外に置かれることがほとんどです。そのため、「覆屋」と呼ばれる石造物のためだけの建物が用意されることもあります。

石の傷む原因にはいくつかありますが、その一つとして風雨によるものがあります。雨水が中に染み込み、亀裂や空洞を作ってしまうのです。ですから、風雨を避けるだけで石造物の寿命が長くなります。今回の五輪塔は凝灰岩※1で造られており、境内の覆屋に安置されていましたが(写真1)、扉が無く風雨が直接表面に当たっており、他の原因と相まって表面が剥がれたりしていました(写真2)。この状態の石造物の保存修復は、



現在の伝北条時子姫五輪塔

1. 解体 (写真 3)
2. 石本体と剥がれ落ちた破片の撥水 (※2) 強化 (写真 4・5)
3. 破片の接合 (写真 6)
4. 亀裂や空洞の樹脂 (※3) による充填 (写真 7)
5. 充填部分表面の復元 (石粉を使い石の質感に似せる) (写真 8)
6. 覆屋の設置
7. 元の位置に戻す という順序で行います。もちろん、いつも同じではありません。覆屋が無い場合は石自体の強化処理 (※4) が中心となります。

※1 凝灰岩…岩石の種類で堆積岩の一つ。脆く崩れやすい。鎌倉時代以前に広く用いられた。
 ※2 撥水…水をはじく性質。防水ではない。防水の場合、内部の水分が抜けず、壊れやすい。



処理前 (写真 1)



処理前の状況 (写真 2)



解体 (写真 3)

※3 樹脂…合成樹脂。接着剤として使用するほか、欠失箇所の復元に用いる。
 ※4 強化処理…撥水性の薬剤を染み込ませ、石自体の補強を行う。



石本体の強化 (写真 4)



破片の強化 (写真 5)



接合用の樹脂を破片に塗る (写真 6)



亀裂に樹脂を流し込む (写真 7)



樹脂の表面を石の質感に似せる (写真 7)



処理後

■ 埋蔵文化財担当者研修会

栃木県教育委員会主催による平成 19 年度埋蔵文化財担当者研修会は、岐阜県大垣市教育委員会の中井正幸氏を講師にお迎えし、平成 19 年 12 月 20・21 日に開催しました。20 日から 21 日午前にかけては国指定史跡を中心に足利市藤本観音山古墳、足利学校、饒阿寺、壬生町愛宕塚古墳、車塚古墳、さらに栃木市・壬生町の吾妻古墳の現地指導をいただきました。

また、21 日目の午後は、「ひるいのおつかこふん 昼飯大塚古墳の調査と活用への取り組み～これからの古墳整備に思うこと～」というテーマでご講演をいただき、中井氏が主体的に取り組まれている大垣市の古墳時代前期の前方後円墳である昼飯大塚古墳を巡る問題を取り上げていただきました。昼飯大塚古墳は緻密な発掘調査が行われ、古墳の範囲、頂上の埴輪列・埋葬施設の配置や空間利用が明らかになり、その成果により平成 12 年に国史跡に指定されました。そうした一連の取り組みや、発掘から整備へ、さらに学校（教師）との連携、GPS 表示システムやヴァーチャルリアリティ表示システムによるデジタル情報の活用に至るまで興味深い内容のご講演でした。

また、これからの古墳整備への展望として、都市景観・都市計画からの視点、ものがたりが体験できるルート設定、市民活動との協働の必要性などを訴えられ、大きな可能性を示されたことが特に印象的でした。



講演の様子



藤本観音山古墳での現地指導

■ 平成 19 年度の現地説明会

埋蔵文化財センターでは、発掘調査の成果をご見学いただく機会として発掘調査現地説明会を実施しています。今回は 2 遺跡を紹介いたします。

もりうら いせき 森後遺跡(さくら市)の現地説明会

森後遺跡の現地説明会は平成 19 年 9 月 30 日(日)に実施しました。当日は朝から寒く、開始時間の午前 10 時頃には強い雨が降り続く状況となりました。このような荒天にも係わらず、約 150 名の参加があり、熱心に見学していただきました。調査では古墳時代から平安時代(約 1700～1000 年前)の竪穴住居跡 52 軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡 61 棟などが発見されました。特に、掘立柱建物跡は、古代の一般集落跡では見られない大型のものであり、その性格の解明が注目されるところです。



森後遺跡出土遺物の説明

あづま こふん 国指定史跡 吾妻古墳(栃木市・壬生町)の現地説明会

栃木市と壬生町の境界に位置する吾妻古墳の現地説明会は、平成 20 年 1 月 20 日(日)に実施しました。当日は寒波襲来のなか、230 名のたくさんの方に参加いただきました。これまでの調査で、古墳の築造当初の周堀や墳丘の面が確認できました。また、古墳に立てられていた埴輪や当時の人びとが使った土器なども出土しました。



森後遺跡の大型掘立柱建物跡



吾妻古墳墳丘～周堀の見学風景



吾妻古墳の埴輪と墳丘

■ 埋蔵文化財センターの体験学習

埋蔵文化財センターの体験学習の中には、縄文土器の縄目模様を再現する縄文施文や、縄文時代に使われていたアンギンと呼ばれる布を編む体験などがあります。少し難しいのですが、話を良く聞いてコツをつかめば、きれいな縄目を捻ることや、細かい布が編めます。センター見学と併せて挑戦してみてください。

縄文施文

紙紐に撚り(ねじる)をかけて縄目を作ります。しっかり撚るのがポイントです。



完成です。
単節の縄文原体の出来上がり。



アンギン編み アンギン編みの 道具



糸がからまないように、
気をつけて編んでゆきます。



出来上がったアンギン



■ 栃木県総合文化センターでの遺物展示

埋蔵文化財センターが保管する遺物について下記の2ヶ所で展示を行っております。近くへおいでの際は、お立寄りください。

やつるぎいせき 八剣遺跡の土偶・動物形把手 とって

壬生町八剣遺跡は北関東自動車道の建設に伴って発掘調査が行われました。その結果、縄文時代後半(今から4,500～2,500年前頃)の大きなムラの跡であることがわかりました。たくさんの土器の他、土偶も発見されました。土偶は人間の形をした土の焼き物です。神の偶像や護符(お守り)など様々な説がある他、ほとんどが壊されて発見されるため、身代わりとしての人形という考え方もあります。また、乳房が表現されるものが多いため、「縄文の女神」と呼ばれることもあります。また、動物形の把手も出土しています。これは土器の口につく把手(突起)で土器の内側を向いてトリが、その背中にへびが表現されている優品です。



八剣遺跡出土 土偶



土器の把手(トリの背にへびが表現されている)

■ 埋蔵文化財センターでの遺物展示

ごんげんやまいせき 権現山遺跡B区 第3号墳出土の須恵器

宇都宮市東谷町に所在する権現山遺跡は北関東自動車道建設に伴って発掘調査されました。この遺跡の第3号墳の周溝内からは、埋葬の儀式に使用された坏や高坏、壺など9点の須恵器がほぼ完全な状態で出土しました。これらは遠く畿内で作られた須恵器で、非常によく似たものが熊本県江田船山古墳や埼玉県埼玉稲荷山古墳から出土しています。この二つの前方後円墳からは、5世紀後半の雄略天皇(ワカタケル大王)の名を刻んだ鉄剣・鉄刀が出土しています。同じ時代、権現山遺跡のすぐ南側にも、この地域の前方後円墳としては最大かつ最古と考えられる笹塚古墳が造られます。前方後円墳の築造を許されたこと、そして畿内で作られた須恵器を多数もらい受けたことは、大和政権への歩み寄りと理解できるでしょう。



権現山遺跡B区 第3号墳出土の須恵器

埋蔵文化財センターの見学・体験学習・職場体験等のお申し込みは
ホームページ <http://www.maibun.or.jp> をご覧のうえ普及事業担当まで TEL 0285-44-8441